

にし きょう 西京区の 文化のはなし

3つの文化からひも解く西京区



西京塾の紹介

「西京塾」は、平成16年に西京について学び・発信する塾生を西京区が公募したことがはじまりです。現在は、まちづくりについて自ら考え、行動する自主的な団体として活動しています。特に自然・歴史・環境の分野で、西京区の特性や魅力を発見し、発信することを目指しています！

発行元／京の暮らしの文化普及啓発実行委員会
西京区役所地域力推進室 (Tel:075-381-7158)
編集・制作／株式会社ユナイティ
令和2年3月発行



本事業は、平成31年度 文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産総合活用推進事業）の助成を受けて実施する「京都の文化遺産総合活用推進事業」の一部です。



本パンフレットは、これまでの歴史の中で培ってきた西京区の文化を次の世代に伝えるきっかけになればとの思いで、まちづくり活動団体「西京塾」等との協働で作成しました。

西京区は、平城京から長岡京、平安京へと至る古代宮都変遷のゆかりの地として、また、旧山陰街道の東の玄関口として発展した独自の文化が根付いています。それぞれの文化の由来や意義、その中に込められた先人の想いや智恵を知り、今の時代に合う方法で、受け継いでいっていただけたら幸いです。

伝統

「伝統文化」にふれる



まつのおたいしゃ 松尾大社・おいでおかえり



松尾大社は京都の西の猛靈と称され、京の都の西を守る王城守護の神社です。

おいでおかえりは、9世紀中頃に始まった松尾祭「神幸祭」（通称：おいで）と「還幸祭」（通称：おかえり）の両祭りからなります。

「おいで」は、松尾大社から分霊された6基の神輿が松尾桂を通じて桂離宮の北東から桂川を舟で渡り、各地を巡行して各御旅所に納められます。一方、「おかえり」は、唐橋西寺公園に6基の神輿が集合し、朱雀御旅所で祭典が行われた後、松尾大社に戻ります。

川面を渡る神輿船に奉安される神輿の真紅の御衣が水面に鮮やかに映し出される光景は、一幅の絵を見るようだと評されています。

年に一度、山から里へ氏子によって迎えられた大神は、人々の丁重なもてなしを受け、より靈威を高められます。この一連の行事により、人々を災害や疫病などの災いから守っていると言われています。

伝統文化とは、た行事が、地域やここでは、松尾

神仏や自然に対する感謝、故人を偲ぶ心、子どもの成長を願う思い、生業や生活の向上を祈る気持ちから生まれ家庭で繰り返し行われ、大切に受け継がれてきたものです。大社の「おいでおかえり」など、伝統を守り、今でも行われている行事について、行事の内容、云われ等を紹介します。



おおはら の じんじゃ 大原野神社・神相撲



大原野神社では、9月に御田刈祭が行われ、「神相撲」が奉納されます。この「神相撲」は、神社の祭祀を執り行うために奈良から来た藤原氏の子孫「斎藤」姓と長岡京建都に関わった秦氏一族の子孫「畠」または「幡」姓から、それぞれ力士を出し合い、双方1勝1負の引き分け勝負をすることで、両氏の共栄を祈る（現在は地域の平安を祈願する）儀式で、1717年（享保2年）から300年もの間、続けられています。

現在は、神相撲に引き続き、地元小・中学校の団体戦・個人戦などが行われます。特に地元小学生による「豆力士の土俵入り」や、誕生1年前後の男の子による「赤ちゃん土俵入り」は人気の行事です。



ほうりんじ じゅうさん 法輪寺・十三まいり



「十三まいり」の由来は、平安時代に、幼くして帝位に就いた清和天皇が数え年で13歳になった際、成人の証として嵐山にある法輪寺で法要を催したことからと言われています。

かつての「十三まいり」は、「衣装くらべ」とも言われ、女の子は西陣や友禅で着飾り、この日に初めて四つ身から本身の着物を着ることが許されるなど、成人前の重要な通過儀礼でした。「十三まいり」以外にも、お宮参り、七五三、成人式など、生涯の節目節目に行われる伝統的な通過儀礼

だったものも多くあります。

現在でも、旧暦の3月13日頃に、13歳になった少年少女が、知恵と福德を授かりに法輪寺の虚空蔵菩薩にお参りしています。また、お参りの後、渡月橋を渡りきる前に振り返るとせっかく受けた知恵と福德がこぼれ落ちてしまうと伝えられています。日常とは異なる特別な日として、現代に受け継がれ、子どもの無事と成長を願っています。



じ ぞうぼん 町内を守る・地蔵盆



世代を超えて地域の人々を繋ぐ京都の伝統行事「地蔵盆」は、地蔵菩薩の縁日である8月24日頃、関西地区を中心に広く行われています。西京区内でも各地で「地蔵盆」が行われており、桂の地蔵寺では、お参りが行われた後、夜店も出るなど多くの人が賑わいます。

「地蔵盆」の起源は、はっきりとはわかっていませんが、江戸時代には、火災から町を守ってほしい、子どもたちを守ってほしいと、お地蔵さんに毎日手を合わせたと言われており、お地蔵さんは町内の身近な神様として大事にされていました。お地蔵さんを祀る祭り「地蔵祭」が、お盆の時期に行われることから、「地蔵盆」と呼ばれるようになりましたと言われています。

近年は、子どもの減少や生活様式の変化などで、「地蔵盆」を簡略化したり、開催しない地域もありますが、住民交流や町内の防犯、防災にも役立ってきた「地蔵盆」が今後も続していくことが期待されます。



食

「食文化」にふれる

西京区の食文化として、段ここでは、京料理に欠かわる話を紹介します。

丘で日当たりの良い地形を活かして栽培するたけのこ、桂川からの豊かな水を活かしたうりや麦などが挙げられます。せない食材となっている大枝・大原野地域のたけのこや、近年では農家で栽培されなくなった桂うりなどにまつ



おおえ 大枝・大原野地域のたけのこ

京料理の早春を代表する食材として「京たけのこ」があります。京都のたけのこ産地は、右京区から西京区、長岡京市までの広い地域にわたっています。この地域でたけのこ栽培が盛んな理由として、段丘で日当たりが良い地形、水はけの良い粘土質の土壤が挙げられます。

大枝・大原野地域では、竹材用の「真竹」^{まだけ}が一般的でしたが、食用たけのこの代表格である「孟宗竹」^{もうそうちく}が栽培され始めたのは江戸時代後期になってからです。その後、竹材よりも安価で加工しやすいプラスチックなどの普及により、次第に「孟宗竹」が増えています。

たけのこの収穫期は4月上旬から5月下旬までです。大枝・大原野地域では、まだ土の中にあるたけのこを「ほり」という鍬で探しながら掘ることで、柔らかく味の良いたけのこを収穫しています。掘り出したたけのこは、日光に当たないようにし、堅くなったりアツが強くならないうちに、できるだけ早く湯がきます。



この地域が高品質のたけのこの産地として知られるようになった背景には、栽培環境の良さだけでなく、栽培者の努力や工夫による栽培技術の進歩があります。

手間暇かけて土の中から
掘り出される大枝・大原野地域の
たけのこは、湯がく際に米ぬかがなくても、
柔らかく美味しいいただけます！

たけのこの湯がき方について

- お湯に米ぬかを入れると、硬いたけのこを柔らかく仕上げることができます。
- 湯がく時間の目安は1~2時間。根っこ部分に竹串がすっと通れば、流水に浸して完成！



桂うり

「桂うり」は洛西の桂川畔の池で栽培されていた越瓜^{ほり}です。成長の過程で淡いみどりからクリーム色に変わり、完熟するとメロンのような香りがします。大きさは70cmから80cm、重さは10kgほどになります。昭和初めには桂地区を中心に約30haにわたり栽培されていましたが、近年は住宅化に伴い生産がみられなくなりました。

現在は、京都府立桂高等学校の生徒による京都の伝統野菜の種子保存の取組のなかで、「桂うり」が栽培、商品化されています。桂高校では、きゅうりくらいの大きさであれば生での食用に、30cmほど成長すると漬物に、完熟するとスムージーにと、収穫期ごとに用途を分けています。生徒たちは、「農家さんから受け継いだ種子を守りたい」、「たくさん的人に桂うりを食べてほしい」という思いで取り組んでいます。桂高校の取組以降、「桂うり」を生産する農家も増えてきました。また昔のように、私たちの食卓に並ぶ日も近い!?かもしれません。



ビール麦

桂は、京都で初めて本格的にビール麦を栽培した地と言われています。明治の西京区は、麦畠が多く、麦の栽培が盛んでした。なかでも1889~1890年(明治22~23年)頃から、葛野郡川岡村でビールの原材料である大麦ゴールデンメロン種の栽培が開始され、酒造企業と連携した麦栽培が発展してきました。

現在は、住宅化が進み、西京区が麦畠であった面影はありませんが、西京区大原野上羽町に当時のビール麦栽培の偉業を伝える石碑が残っています。

桂女が京に売り歩いた桂飴を作ってみよう！

今ではみることがなくなりましたが、麦芽の糖分でつくる「桂飴」は、西京区の名物でした。この「桂飴」の歴史は古く、古墳時代の応神天皇が幼少だった頃、手作りの飴で皇子を育てたことに由来すると言われています。

江戸時代には、桂女が桂川の鮎などと一緒に「桂飴」を京中に売り歩いたという記述もあります。桂女は、行商以外にも、助産や芸能、巫女として縁起を祝う慶事の祝言の祓なども行っていたようです。

【桂飴の作り方】

- 蒸したもち米に麦芽を混ぜて寝かす。
- 糖化したら液を絞り、煮詰める。
- 熱のあるうちに包丁で筋を入れておき、冷めたら手で割る。

※ 手で割った不揃いな形が「桂飴」の特徴です。



歴史

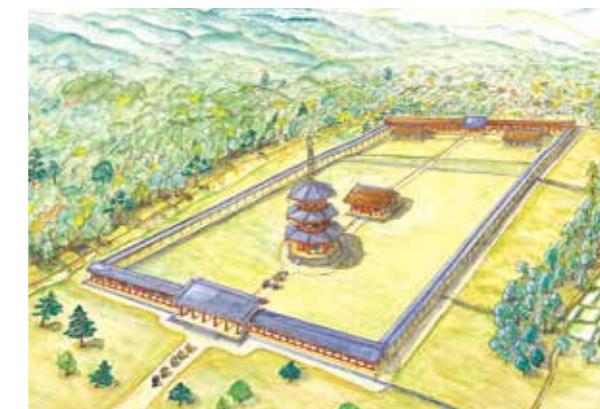
「歴史文化」にふれる



かたぎはらはいじあと 楪原廃寺跡史跡公園

西京区は古くから人々の文化に触れるとともに、旧ここでは、今でも当時の

営みがあり、特に、奈良時代から平安時代にかけて、都が平城京から長岡京、平安京へと遷る中で、先進的な山陰街道での物資や人の盛んな往来で生まれた文化により、様々な文化が融合し発展してきました。面影を残す旧山陰街道や、その宿場町、史跡公園に加えて、「西京区と言えば月!?」と言われる理由に迫ります。



推定復元図

西京区の月見文化



古代中国の書物に、「月に巨大な桂の木がある」という記述が残されています。その後、月で桂の木を切っているという伝説が日本にも伝わり、日本の書物にも登場するなど、月と桂は古くから文学上でも結びつけられています。

桂は、平安の昔から貴族が別荘を営んだ土地で、「源氏物語」のなかでも、「月」や「桂」の歌が多く、桂の地が月見の名所であったことが想像されます。

また、江戸時代に建てられた桂離宮には、「月見台」、「月見橋」、「月見桜」などがあり、月を見るための施設と言われています。離宮内での月見の歌会で作られた月の歌が数多くあります。



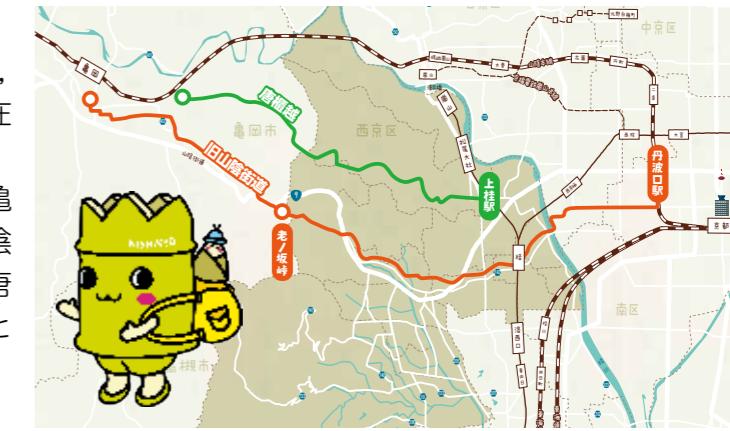
丹波への道 旧山陰街道



唐櫃越コース（桂坂野鳥遊園北側）から見る西京区の眺め

櫻原、中山、塚原、沓掛を経て、老ノ坂に続く道で、国道9号線とほぼ同じルートとなっており、現在でも重要な道路です。

丹波一国を領有していた明智光秀は、現在の龜岡市に丹波亀山城を築城し、京に通じる「旧山陰街道」の整備を行いました。本能寺の変では、「唐櫃越」、「旧山陰街道」を通り、京へ軍を進めたと伝えられています。



かたぎはらしゅくばあと 楪原宿場跡

「櫻原」は、京と丹波・山陰地方を結ぶ「旧山陰街道」と、大阪方面に向かう「物集女街道」が交差する交通の要所であり、江戸時代には、京を出て最初の宿場町として大いに繁栄しました。また、物流や人の往来も多かつたことから、ぼた餅をつくる向かいの家に届けようとしたところ、大行列で道を横断できず、餅が腐ってしまった!?という逸話まで残っています。

明治以降は、鉄道等の整備により、丹波からの物流の中心が他に移り、現在は、当時の面影を残す貴重な街並みとして、地域の方による保存活動が行われています。

櫻原本陣跡「玉村家住宅」



「玉村家住宅」は、旧山陰街道の宿場町として栄えた櫻原宿の本陣として、参勤交代の大名等の宿所にあてられていました。伏見宿の本陣が現存しない今日、この住宅は、市内で唯一残る本陣遺構となっています。

こばたけがわ 小畠川



別名、「明智川」と呼ばれている川で、明智光秀が1575年丹波平定のおりに、櫻原を補給地とし、老ノ坂から櫻原、桂までの道を整備した時に、併せて溜池や灌漑用水を開削しました。